

未来への扉を開く  
—映画で出会う新しい世界—

神戸市外国語大学 3年 新山 沙樹

「私が将来の夢を持つきっかけは何だったんだろう？」

ふと自分に問いかけた。私には映画の字幕翻訳家になりたいという夢がある。高校 2 年生の冬、ひとりで映画館に出かけて観た映画の最後で翻訳家の名前がスクリーンに映ったのを見て「あ、これだ」と思った。大好きな「映画」と「英語」に関わることができるからだ。

「そういえばなぜ英語を好きになったんだっけ？」

その答えもやっぱり「映画」だった。中学 1 年生の時に観たあるイギリス映画に衝撃を受け、没頭した。それ以来、気が付けば「映画」と「英語」は私の中で人生に欠かすことのできない重要な要素となっていた。

このような自問をするきっかけとなったのが、ちょうど 1 年ほど前に出会った NPO 法人 World Theater Project の存在だ。Facebook で見かけた記事に書かれていた「映画で国際協力」という文句に、映画好きで「国際協力」という言葉に敏感であった私はすぐに飛びついた。それから間もなく、私はボランティアメンバーとして活動に携わるようになった。

World Theater Project は「映画を届ける」ことで途上国の子どもたちを支援する団体である。映画は、食糧や衣服のように必需品ではないけれど、私たちの生活を豊かにしてくれる。先進国に住む子どもたちの多くは映画やアニメを観て、ヒーローに憧れたりアイドルを夢見たりした経験があるのではないだろうか。しかし、電気がない途上国の村に住む子どもたちはそのような情報を得ることもなく、農家や学校教師といった身近で限られた職業しか知らずに育ってしまう。そんな子どもたちのために途上国の村や学校へスクリーンやプロジェクター、発電機を持ち込んで移動映画館を行い、新たな世界を知ってもらうことで「夢の種まき」をしているのだ。この事業を推進するために私たちが国内で行っているのが「日本で映画を楽しむことで途上国支援に繋がる仕組みづくり」である。例えば、映画をテーマにしたイベントを開催し、そこで得た収益を移動映画館事業に充てている。

しかし、この活動にも様々な壁がある。まず、映画は固く権利に守られており、公に上映するには許可や時に高額な上映料が必要となる。また、私が今年カンボジアの農村を訪れて子どもたちが置かれている環境を目の当たりにした際、もし子どもたちが夢を見ることが出来ても実際どれだけの子が夢を追い続けられる状況にあるのかと疑問に思った。映画によって新しい世界を見せてしまうことに責任感すら感じた。その一方で、私の中でこの活動をより発展させ子どもたちが夢を追い続けられる手助けをしたいという気持ちが一層強まったのである。

この活動を発展させるためには、まずより多くの人に活動を知ってもらい支援を頂くこ

とが必要だ。現在は映画関連イベントを定期的に行っているが、開催地域がどうしても支部のある東京や大阪などに限られてしまう。そのため、例えば、全国の劇場で対象の映画を鑑賞すればチケットの売り上げの一部が途上国での移動映画館事業に充てられる仕組みが作れないか考える。そうすればこの活動の知名度が上がり、集めた資金で上映権の壁も越えられるかもしれない。最終的には途上国の村に常設の映画館を作りたいと思う。子どもたちが好きな時に映画を楽しめる環境を作ると同時に、映画というツールから映画技師や映画監督といった職業が途上国の子どもたちにとって身近なものになったら理想だ。現在 World Theater Project が主な活動拠点としているカンボジアでは、ポルポト政権に支配されるまで映画産業が盛んであった。政権崩壊から 40 年近く経った現在、またカンボジアに映画で栄える時代がやってきたらなんて素敵だろうか。

途上国の子どもたちに映画を届ける活動は、実際にどれだけ効果があるのかすぐには分からない。目に見えるようになるのは 10 年、20 年も後のことかもしれない。それでも私はこの活動の支援を続ける。将来「きっかけはあの時観た映画でした」という声が聴ける日を夢見て。(1598 文字)